

体験の香り

ダニエル・アレイシヨ
(サンパウロ大学)



二度目の日本訪問で、私はその香りに初めて気がついた。それは冬の香りだ。

私の目は街路の光、看板、そして人々の顔を捉えた。それは雨の夜明けの散歩のポートレートだった。その香りは、まるで忘れられた友人のように、私が覚えていないにもかかわらず私を待っていたのだ。私は視覚イメージに純粹にこだわるあまり、ノスタルジーというものが、カメラやデカルのように視覚的に想像されるものを根本的に超えた存在であるということを忘れていた。ノスタルジーは視覚イメージの形でも機能するが、それだけにとどまるものではない。私は飛行機と羽田空港をつなぐ通路に立ち、記憶は他の感覚にも宿っているのだということを、まず嗅覚を通して再認識したのであった。言語は私たちの継母のような役割を果たすが、その言語ですら、意味論の策略によって日本の香りの意味を示すことはできない。乾いたおがくずとプラムのジャムの匂いを比較することはできるが、言葉で説明することはできない。私に言えることは、この香りを覚えているということだけなのだ。

弁当が食べ物を温かく保ってくれるように、身体は懐かしい記憶を保ってくれるものなのかもしれない。私の足は街路や狭い路地の襞、そして雪やアスファルトを覚えていた。私の耳には、枯れ枝にとまるカラスの声、湖のほとりで泡を立てる鯉の声、そしてまるで古い友人のように響く電車の音が聞こえた。私の手は硬貨やカード、壁、木、そして旧知の顔に触れた。私の口はかつての情熱の風味を味わった。私は未熟で、肉体をうまく言葉にすることができず、こうした書き方をするしかない。何かの研究に熱中する者にとっては、このような「語れないこと」と「語らなくてもよいこと」の出会いが喜ばしいことなのだと思う。何かを意味づけようとすることは完全なる敗北を見るが、私たちはそれと戦い抜くことによって、生涯にわたる喜びを得ることができる。研究の仕事とは、何よりもまず、新たな戦いを正当化するための敗北の戦いなのだ。

神奈川大学で初めて触れた場所は、横浜キャンパスの図書館だった。その後、新しく豪華なみなとみらいキャンパスを訪れた。神奈川大学は1928年に米田吉盛氏の尽力で創立された。彼は当時いわゆる民主主義制度の運用を試みていた日本社会の倫理的危機の目撃者であった。治安維持法が進歩的政治団体と結びついた「破壊的」思想家のグループを抑圧していた時代に、この大学は勇敢にもその基礎を築いた。2008年に設立された非

文字資料研究センターは、紙芝居や毛沢東時代の中国文化大革命の図像資料、地域の民俗や生活に関する浮世絵、川合安平の写真や戦前・戦後の漫画など様々なコレクションを所蔵している。まだ書誌情報のない資料もある。そこは、表意文字の意味とは無関係の色や形の気配に満ちていた。あるいは、色や形が独自の言語を作り出しているようでもあった。この研究センターは、文字や語源、構文や言語の枠にとらわれずに表現というものについて考えることは可能か、と私に問いかけてきたのだ。

日本のシュルレアリスト瀧口修造によって見事に再定義されたフランスのシュルレアリスムのリーダー、アンドレ・ブルトンの次の言葉がすぐに頭に浮かんだ―「眼は未開の状態で存在している」。つまり、感覚の世界では眼だけでは不十分なのだ。夢もまた表現せねばならない。口に関していうならば、言葉とは名付けようのない海に囲まれた島の人口を形成するようなものである。

さて私は、この短くあわただしい期間に、演劇の錬金術師、寺山修司と暗黒のダンサー、土方巽という2人の人物を通して、日本のシュルレアリスムの詩学とカウンターカルチャーの演劇やダンスの芸術言語との接点を探求した。そしてその間、水川敬章先生が私の指導をしてくださった。また、アングラ演劇の専門家である秋吉大輔先生からも貴重なご助言をいただいた。まとめとしては、寺山と北園克衛率いる詩人グループとの初期の交流、そして土方と現代フランスの呪われた文学、特に瀧



写真1 水川敬章先生と神奈川大学みなとみらいキャンパスにて



口と濫澤龍彦が翻訳したものとの近接性を出発点とすることができるだろう。

横浜キャンパスの図書館では、瀧口修造や西脇順三郎の詩集や随筆集を何時間も読みふけた。東京国立近代美術館では、赤瀬川原平、工藤哲巳、中西夏之、堀川道夫、古賀春江、石井茂雄、小牧源太郎らの超越的な作品に没頭した。写真集食堂めぐりまでは、細江英公、東松照明、奈良原一高、森山大道の写真集に取り囲まれた。ときの忘れもの美術館では、陳立志氏にお会いし、瀧口修造のデカルコマニアの原画を見せていただいた。岡本太郎記念館では、芸術家の存在と時代の重みを思い起こさせるようなアトリエを目の当たりにした。

舞踏家の笠井勲氏のオイリュトミーのクラスに参加したあとには、1978年にペルーにおいて、エウジェニオ・バルバの仲介でラテンアメリカの地で初の公演を行った舞踏家である三浦一壮氏と会話した時に書いたものと同じくらいの長い文章が私の日記に残った。慶應義塾大学アートセンターは私にとって一週間の間の温かいたまり場で、そこでは研究者の石本華江氏、森下隆氏、吉田悠樹彦氏、久保仁志氏らと考察をし、インタビューをし、ゴシップなどを語りあった。世界で最も充実しているとされる舞踏と日本シュルレアリスムの情報センターでは、ポスターや公演プログラム、パフォーマンスの視聴覚記録、衣装や舞台装置、世界中の書籍や論文、詩人の間で交わされた手紙の原本などを閲覧することができた。人間関係が繋がったことで、外交官ロメロ・マイア氏の仲介により、東京のブラジル大使館で行われた舞踏とブラジルダンスとの相関関係に関するイベントで、森下氏とともにスピーチをするという機会にも恵まれた。



写真2 在東京ブラジル大使館にて舞踏についての講演をする



写真3 慶應義塾大学アートセンターにて研究員の森下隆氏、石本華江氏と



写真4 ダンサー・笠井勲氏と

さらに、アーティストゆかりの重要な場所を訪れ、時を経ても変わらないオーラを捉えるという私の直感的な習慣に基づいて、かつて寺山修司の天井桟敷があった場所や土方翼のアスベスト館、細江英公の写真集『鎌鼬』の舞台となった路地や寺院、そしてカウンターカルチャーの重鎮たちの旧住居などを訪れ、その雰囲気を感じとることができた。

稲荷神を祀る寺院に護られた山の頂上から鎌倉の海を眺めると、太平洋は神秘に満ちた凍てつく大海原というよりも、一筋の青い光のように見える。このように、野生の眼は、怪物の形をした波を物語る、風変わりな夢への入り口なのである。目に見えない海の牙は、思い出の砂の向こうの安らぎの隠れ家として機能している。浅瀬では、この濃密な体験の3分の1も5分の2も引き出すことができないだろう。大きな波に飲み込まれるのがあまりに速すぎるのだ。

冬の香りを抱えて帰ってきた。次回訪れるとき、私の感覚は一体何を思い出すのだろうか？